にゅうすレター
News Letter 2008 10

9 月・研究会報告

●9 月の研究会のテーマは、若手保育者による提案。「子どもの頃、楽しかった遊びは何ですか？」と質問されたらあなたはどんな体験を思い浮かべますか？・・・世代を越え「遊びについて」考えました。

「保育を遊ぶ」
～温故知新～

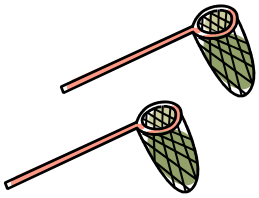
話題提供:若手保育者グループ
山川　洋輔・小林　淑恵・山下　雅弘

若い保育者のなかには、自身の子ども時代の遊び体験を話せない人がいます。テレビゲームの台頭などにより、今日の戸外遊び体験に乏しく、全身で五感をつかう遊びが減少している実態について、今回参加者の皆さんと議論をしてみたいと思いました。

●　僕、私の遊び体験

山下　サッカー少年だった小学校時代は、下校したらサッカーの毎日でした。そんな子ども時代だったので、同年代と比べると遊び体験は少なかったかもしれません。そんな僕にも、自然の中で遊ぶ体験が少なからずありました。幼稚園の頃は土手すべりが好きで、近くの森林公園でよく遊んでいました（左上写真）。

小学生になると海や川でカニや魚を獲って遊んだり、山で「蛇探し探検」、防空壕を見つけて遊んだりすることもありました。そんな子どもだった自分は、今でも好奇心旺盛で保育中は子ども達と一緒になって虫を探したりしてしまいます。



小林　子どもの頃祖母の家の近くに林があって、大人の人と一緒にセミを取りに行っていました。私はまだ小さかったので、セミやセミの抜け殻を籠に入れてもらい、持ち帰ることを楽しんでいました。子どもの頃の遊びの記憶は、このような祖母の家での自然体験が強く印象に残っています。

また当時の写真を見ていると、子どもたちよりも大人たちの方が真剣に遊んでいる場面が多かったように感じられます。

そして保育士になった今、改めてそれら写真の中の光景を眺めてみると、思わず規制・禁止をしてしまいたくなるような･･･危険と隣り合わせの遊びを自分自身がしていたことにも気づかされました。

大人に心の余裕があり、遊びを楽しめる環境があったからこそ、私も「遊ぶこと」を楽しみ、広げていくことができたのだと思います。

●　参加者の遊び体験より

T さん　「小学校時代は家にいることはほとんどなく、鞄を家に置いてから暗くなるまで毎日外で遊んでいました。どちらかというと人形遊びやおままごとというより、木登りや基地遊びをしていました。」

S さん　「近所のお兄さんお姉さんにくっついて遊び、おままごとでは家の庭の草をとってきて、本物の包丁と水を使って遊んでいました。人形遊びの人形は洋服も全部手作りで、他にも道端で焚火をしたり･･･生活そのものが遊びになっていましたよね。」

N さん　「保育園の頃は、小学生のお兄さんたちに

混ざって遊んでいました。小学生になると同級生と遊ぶことが多くなり、4 年生の時ファミコンが出てからは、ゲームをして遊んだ記憶しか残ってないくらい印象が強かったです。」

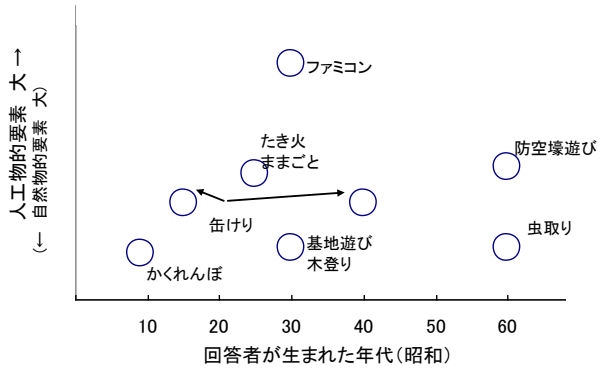
I さん　「中学に上がる頃までは毎日、女の子同士屋外で膝や肘に傷が絶えないような感じで、探険ごっこをしたり･･･崖の上を這いずりまわって遊んでいました。家が線路沿いにあったこともあり、線路内で石を積んでみたり、雨のあとに出来た水たまりで遊んだり、今ではなかなかできないことをして遊んでいましたよ。」

● 参加者の記憶の中の遊び体験

虫探し・戦争ごっこ・素もぐり・陣地取り・かくれんぼ・缶けり・田んぼ遊び・ごっこ遊びなど

● 遊び体験グラフ

当日参加された皆さんの遊びの記憶。すこし整理をしました。今回は母数が小さいため解釈をすることは困難ですが、いつかこのように保育者自身、ひいては大人たちの遊び体験を掘り下げて時の経過を辿ると、なにか見えてくるものがあるかもしれません･･･ね？



● 遊び体験の考察

参加者のみなさんと共有した様々な「遊び」の記憶からこんなことが見えてきました。

- 昔は近所にお兄さん・お姉さんが沢山いて、空き地や原っぱにおいて交流の場があった
- 昔の異年齢集団の遊びでは「みそっかす」「おまめ」ルールを上手に使い、大きい子も小さい子も一緒に楽しめる工夫があった
- 昔は焚き火やナイフで鉛筆けずり･･･など生活体験が直接遊びにつながっていた
- 基本的に外遊びは子ども自身が工夫を凝らし、展開することのできる要素がたくさんある
- 当時、親に見守られながら遊んだ記憶はない
- 近年のテレビゲームや市販玩具の普及により遊び環境が大きく変化し、人工物（人工的環境）で遊ぶことが増えてきた

これらのことから今昔の「遊び」体験は単に自然と人工という違いだけでなく、地域の遊び場や異年齢同士の交流といった、現代社会では保障することが難しくなってきている物的・人的環境の作用が大きくあることがみえてきました。

● 各地に伝わる迷信たち

この後「遊び」の話からテーマが「迷信」について発展していきました。先祖代々伝わる言い伝えや民話が子どもに危険を教える知恵だった･･･と。その中のひとつを掘り下げて、ご紹介します。

◎長野に伝わる◎
デーランボー（ダイダラボッチ）の伝説

（文:小林　淑恵）

立ち上がれば頭が雲の上に出て、浅間山を一跨ぎするほどの大男、「デーランボー」。長野県の盆地、池、湖など至る所に彼の伝説があり･･･

長野の観光名所の一つ、雲場池にも彼の話が伝わっています。数十年前、ここには池の隣にアメリカの寮があったそうです。地元の人々は池で遊ぶ風習はありませんでしたが、アメリカの人たちの間では池で遊ぶのが当たり前で、雲場池でもよく遊んでいたとか。しかしこの池はとても冷たい湧水のため、そのうち子どもや大人が何名か亡くなる事故が起きました。

その後、雲場池の形が足型に見えることから池がデーランボーの足跡でできたと言われるようになり、あるとき彼が池で遊ぼうと足を踏み入れると、池が底なし沼と化し、そのまま沈んでいったという迷信が生まれたそうです。

私はこのデーランボーが雲場池に沈んだという話を小学生の頃から何回も聞かされ「池は危ない」という思いが強くありました。近づくことはおろか、中に入るなんてことはありませんでした。また、他の子どもたちの遊ぶ姿も見ることはなかったと記憶しています。

･雲場池周辺の地図

･雲場池の景色

● 参加者からの集まった迷信集

【生と死に関係するもの】
・うそつきは閻魔様に舌を抜かれる
・ 悪いことをすると地獄に落ちる
・ 夜口笛を吹くと蛇が出る
・ お墓の前を通ると火の霊がでる
・ 夜に爪を切ると親の死に目に会えない
・ 新しい靴を部屋のなかで履き、そのまま外に出てはいけない（靴を脱いで、玄関で履き外に行く）

【生き物に関係するもの】
・ ミミズにおしっこをかけるとおちんちんが腫れる
・ 食べてすぐ寝ると牛になる
・ 鳩を追いかけると馬鹿になる
（↑親のつくり話だったかも・・とＳさん）

【その他】
・ 馬鹿の三寸、間抜けの一寸
・ 茗荷を食べると馬鹿になる
・ 壁に耳あり、障子に目あり
・ ほうきに手ぬぐいをかけて玄関においておくと、よく長居をする来客が早めに退散する

● グループ討議

そして最後に･･･皆さんがグループにわかれて、さらに以下のように話を深めていくことができました。

◆ 昔の子ども・今の子ども

・ 昔は異年齢同士の関わりが多く、現在は同年代の関わりが中心になっている。
・ 今は夜が明るい。昔は夜が暗く、子どもたちは闇の怖さを知っていて、様々な迷信につなげることができた。怖いものがあることは大切。
・ 今の子どもは遊び場もないけれど、時間もない。
・ 遊び場が減った。公園の減少だけでなく、何もない野原（空き地）も減っており、デパートのおもちゃ売場などが「遊び場」になってきている。それでは自分たちで創る遊びが培われない。
・ 自然環境があっても、そこで遊ぶ体験がなかなかできていない。親世代に体験がないとモデルがなく、遊べない。
・ 様々な体験を挑戦する前に制限されてしまうことが多くなり、子どもたちは考えて行動をすることができず、体得がむずかしい。
・ 屋外でもゲームが出来るようになったことで、会話をしなくても遊ぶことができてしまう。

◆いま、保育者として出来ること･･･

・ 公園の遊具にまで危険を理由に年齢制限がある世の中。それに代わるものをいかに工夫・提示できるかを考えていく。
・ 職員会議などの前に職員が実際に遊び、体験をしてみた上で考え、話し合うとよいのでは？
・ 虫遊び体験の必要性を確認する。子どもは虫を簡単に潰したり、手足をもいでしまうなど残酷な部分も持つが、これは命の大切さを身近に感じることのできる体験であるという認識を持つ。
・ 遊ぶことを知らない親が増えてきているため、遊ぶことの楽しさ、大切さ、必要性を保護者や大人たちへ伝えていく。

■ 幼児教育の現場では、子どもが自分で決めたことに取り組み、自ら考え、時に成功をし、失敗をする。色々な気持ちの葛藤を経験をする･･･そんな生活体験を丁寧に重ねる場で在ることが今、改めて求められている、ということなのではないでしょうか？

（文：YY&MY）

9 月・会場の感想

迷信って沢山あるのですね。もっと知りたいと思いました。人工物の中で子どもを育てる良さは何でしょうかね？

若手保育者のパワーに触れ、元気をもらいました。頼もしく、保育の明るい未来が見えていると実感しました。年齢関係なく、頑張りましょうね！

子どもの頃の気持ちを思い出しました。自分より年上の方々の遊び体験に共通点が沢山あることを知りました。テレビゲームを家でやるようになったことは一番の大きな環境の変化だったように思いました。

若手のエネルギーを強く感じました。異年齢の参加者が共に学び合える時間が充実していました。

「お米はお百姓さんが八十八回手をかけたものだよ」というふうに言うと、意味はわからないながらも子どもは神妙に聞いてくれます。畏れの気持ちと感謝の気持ちは背中あわせの関係かも。怖いもの、死、闇。本当は大切なのに目を背けているような気がします。

時代の流れと共に感じ方が違うことを改めて感じました。今は何もかもダメで昔は良かったという議論だけでなく、現在の状況を踏まえて子どもたちがおかれている立場をよく理解し,保育にとって大切なこと忘れてはならないこと･･それはいつの時代も同じだと思います。そこを皆さんと確認をしていきたいです。

●汐見稔幸から、ひとこと解説

遊びを思い出して語り合うという試みは、とても面白いですね。みんな子どもの頃を思い出しながら、今の子どもと重ねている。できれば、こんなところで、こんな遊びをしたことが今一番頭に残っているという記憶のイメージを絵に描いてもらって、それを比較するともっと他のこともわかったかも知れませんね。記憶に残っている遊びの場にはどんな特徴が多いか、どういうものや風景がこどもの遊びを誘うのか、等が見えてくるかも知れません。これは、幼稚園や保育園で保護者の方々にしてもらうといい試みかも知れません。語り合って、子どもと遊ぶことの大切さを実感してもらうわけです。

話し合いの中で、今の子どもは何もない原っぱや道ばたで遊んでいないという主旨のことが出ていました。何もないから自分たちで工夫して遊ぶしかない。でもその工夫が面白いから、どんどん遊び出す。そしてその工夫の過程で、実は子どもたちが育っている。そういう場が、なくなっているということですね。

そうだと思いますが、できれば、そうした指摘にとどめず、だとしたら幼稚園や保育園で、そうした何もない場、自分で遊びを創造するしかない場を確保して、そこで遊ぶおもしろさを体験するカリキュラムとていねいにつくるということに挑んで欲しいなと思いました。そのためには、場の確保という問題と、今の子どもたちにそうした場で遊べる身体に刻み込まれたワザをどう獲得していってもらうのかという問題と、この二つをクリアしなければなりませんよね。それをどうするか。若手の保育者にはぜひそうしたことに挑んでもらいたいと思いました。そのために、保育者自身が、夏の合宿のように、自然の中を歩きまわるような遊びを楽しむことが大事だと思います。

清里をもっと利用しましょう。

夏合宿　報告記　2008.8.2-3

● *恒例の夏の合宿、今回は森と牧場の２組に分かれて八ヶ岳南麓･清里で大いに遊び、楽しんできました！*

ようこそ「森のおとな解放区」へ

～キープ･森のプロジェクト～

案内役と文; 小西貴士 氏

講師紹介 財団法人キープ自然学校にレンジャーとして勤務。2002 年から現在まで「キープ森のようちえん♪プロジェクト」で 3～6 歳の幼児とその家族と共に 1～4 泊の宿泊型プログラムで年間 120 日以上活動している。自然の中の子どもを撮り続け、ライフワークにしている。

･･･「いつも通りでイイからさ。

ウン、そうそう。じゃ、よろしくネ。」

こんな汐見先生の一言からこの夏、合宿でみなさんと森の時間をご一緒することが決まった。(*リンショウケンって何…？いつも通りでイイのね？*) これがその時の偽らざるボクの気持ち。

さて、当日の朝。いつもそうなんだけど、森の準備は当日する方がイイ。空模様、気温、まだ見ぬ顔々、今日の体調と気分、野生の勘…。足し算、引き算、掛け算、割り算をしながら、ザックにいろいろを詰めてゆく。その日は、渓谷の湧水でドリップするためのコーヒーセット。もちろんいつもの救急セットなどなども。ん～…、なんか違うのよねえ。何だろ？夏 8 月、渓谷ヒミツの場所までの汗、冷たい水…。お！そうダ！スイカ冷やしてガブリ！なんてイイじゃありません？出発まであと 20 分！急いで八百屋さんへ。働いている友人が２玉選び･･･「いつも通り今日もサイコーに甘いよ！」と。

森で過ごした時間の報告は、参加された皆さんにお任せするとして…。僕が森に行く時、大切にしていること＝それは「イツモドオリ」という感覚。森は命の集合体。だからホントは四六時中変わってゆくわけだし、いつも同じということはありえない。でもね、それでも「イツモドオリ」。あまり考えこんで張り切って森へ行くと、いつの間にか森や人を自分の意に沿うように考えていることがある。だから「イツモドオリ」で行ってみて、違うところに敏感なくらいが楽チン。そして、そこから生まれる余裕を、いろんな楽しみや発見、安全のほうに回してゆけばイイ。森での保育もそこが肝心。子どもとお母さんの気持ちが置いてけぼりにならぬよう、森がお茶の間や難民キャンプともつながっているよう、「イツモドオリ」の自分であること、大切にしていたい。

･･････････････

そうそう、その日森で印象に残ったことをひとつだけ。それはみなさんが「少女のようだった」こと。これ大真面目ですヨ！それも「イツモドオリ」かな。

●とにかく面白い！常に何かもっと面白ものないか、と・・子どもの世界をテクテク歩いてきた先生、先生ご自身がまるで 1 冊の本のよう！　昨年夏に続きアンコールに答えて、今回のお話しは？

アンコール「杉山亮先生登場！」

～道具のお話し～

文; 杉山　亮 氏(なぞなぞ工房主宰)

講師紹介大学を中退し保父の資格を得、都合 8 年間保育園に勤務し、その後一念発起しておもちゃ作家に転身する。埼玉の長瀞で「なぞなぞ工房」を起こし、各地で個展を開く。40 代からは児童書・絵本のテキストを書く仕事を中心に幅広く活躍している。小淵沢在住。著書多数。

この夏の清泉寮の合宿では、子どもの道具についての話をさせていただきました。ランドセル、色鉛筆、ハサミ、シャベル、といった子どもならではの道具の選び方の話です。

自分の保父時代の体験にもとづいて、どうせ、買うならこういうのを買った方がいいと思うというアドバイスなのです。･･･がその行為を通して子どもを応援するとはどういうことなのか、どういうものを選び、どういう角度で提供することが子どもを応援することになるかといった視点もこめたつもりです。

人の営みはたいてい道具を使うし、人の表現はたいてい自分の力と道具の力の合計点なのですから、道具の話は大切です。でも、保育・教育の世界はなぜか精神論・抽象論が横行しやすい分野で、道具のような具体的なものの話をする人はあまりいません。

写真提供　小西貴士氏

例をあげると、「子どもにはこんな本がいい」と語ったり、語りたがる人は大勢いるけれど、「子どもにはこんな本棚がいい」と理由をあげて語れる人はとても少ないです。精神論をいいたがるのは子どもをてっとりばやく変えたがる教師の一種の病いかもしれません。

確かに、人の心に直接語りかける{ようにみえる}本という素材はそういう人にとって、とても魅力的な素材です。一方、その本を収容する本棚は本を整理して保管できるし、整理を通して本の世界全体との付き合い方を教えてくれる、具象物です。

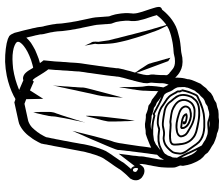
とりあえず、買うか作るかして子どもの前にもちだせば、じきに結果を見ることができます。よくなければ、なにがよくなかったのかもわかります。その、常に具体的であるというのが、道具の話のいいところで、ぼくが好きなところなのです。

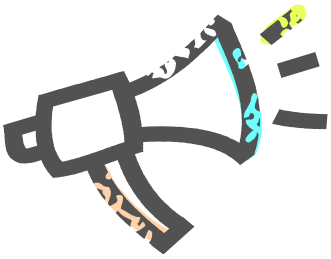
○先生の著書には『あなたも名探偵シリーズ』『子ども講談シリーズ』など多数。ユニークなおもちゃ絵ポスターは大人気、大人も子どもも楽しめます!購入は http://www.h6.dion.ne.jp/~sugiyama/index.html からできます。(なぞなぞ工房でのお話しライブは夏限定ですが、講演やワークショップは全国各地で・・)

参加者の感想より

初めて参加させていただきました。
印象に残ったのは、ズバリ！　森のようちえんプログラム。道なき道をどんどん突き進みながら、大丈夫なのか…と正直不安でした。団体行動が苦手なので、必死についていきました。自分のことだけで精一杯。自然の中では自分を隠すことはできませんね。森が引き出す自分自身の真の姿に愕然としつつも、すっきりした気分になれたのは、どうしてかしら～と今でも思います。二日目の杉山亮先生が嬉しそうにお話する姿にも元気づけられました。参加したみなさんがとても優しくて初参加の緊張もどこかに飛んでいきました。ありがとうございました。K

何といっても、印象に残っているのは、山の湧き水（河童のいのち水）の冷たさと美味しさです。刺激的だった山椒の実。リスの割った胡桃の殻。蛍の明滅。可憐な野草の花。苔むした岩肌。正味一日半だったとは思えない程、充実した合宿でした。ありがとうございました！！





わかって！！

若手保育者から発信し、みなさんと交流を深めるコーナーです

初回の『リフレッシュ方法教えて』では、

皆様から沢山のご意見を頂きました。ありがとうございます。これからも毎回若手から、疑問や悩みを投げ掛けていこうと思っています。皆様からの**ご意見**や**アドバイス**をお待ちしています。同時に保育の中で**感じていること**、**悩み**なども募集しています。みなさま、どうぞふるってご協力ください！

◆ リフレッシュ方法・・・教えて頂きました！！ ◆

♪ドライブ、コンサート、温泉に出かける。
♪俳句づくり。日々見たこと感じたことをメモして、作句する。
♪時間が許されれば、旅にでる。
♪公園でひたすらジャグリングをする。（子どもが立ち止まってポカーンと口をあけている姿をみると喜びを感じます）
♪水に触ると落ち着くので、手を洗う。
♪エレクトーンを弾く　♪菓子作り　♪園芸　♪地声で歌う
♪労働のあとの晩酌
♪落語のCD、DVDを見たり、聴いたりする。
♪マンガを読む。（“リアル”、“舞姫テレプシコーラ”、“海街ダイアリー”がおすすめ！）
♪大好きな音楽を聞きながら、おいしいコーヒーを飲む
♪自然を眺めて山歩き。
♪山の懐に抱かれて自分がちっぽけだと感じる。
♪気の合う大切な仲間とおしゃべりをする。嫌なこともガマンしないで吐き出してしまえば、気持ちがリセットできる。
♪散歩でひたすら歩く。畑の中、空を見上げたり、木を眺める。
♪朝もやのかかる中や、夜の町を1時間くらい歩いたり、走ったりするとぐちゃぐちゃの頭の中が少し真っ白になった気がする。

■　今回のテーマ■

クラスの話し合い、どうしていますか？

クラス内で早番、遅番のローテーションがあったり、乳児だとさらに一人ひとりリズムが違うため、午睡帯の時間に集まれなかったり……と保育園ではなかなか担当がまとまって話し合い出来る時間が取れないと思います。でも、同じ思いで保育していく上でも話し合いってとっても大切！みなさんの話し合いの時間の取り方、時間作りの工夫を教えて下さい！

（YK さんより）

■　投稿はこちらへ　■

info@ikuji-hoiku.net

上記の呼びかけにお答え頂ける方は、研究会当日に配布される**アンケート**、または Email アドレス↑**迄**ご意見をお寄せください。

■　気づき＆悩みも募集します　■

「わかって」コーナーでは同時にこのコーナーで取り上げてほしいテーマも募集します。皆さんの日頃の思い・・・どしどしお寄せください。お待ちしています。

編集後記

●団塊世代の情熱溢れる保育者から若手保育者へとバトンがつながれる時代になり、期待が高まっている。各園での若手の育成は早急な課題であり、一朝一夕では体得出来ない保育の技術や子ども観を伝えるため、気長な指導が必要となる。そのためにはまず保育者自身が心のゆとりをもつことがとても大切だ。日々の保育の中で子どもを観察し、記録する。課題を職場の仲間たちと議論する中で子どもの育ちを援助する。保育は生活そのものであるから、大きなお家の一人の家族だという意識をもちたい。心を亡くした状態だと、日々の業務に終われ燃え尽きてしまうだろう。実践の振り返りの中で、反省点を指摘し、認め合える。そんな職員集団を目指したい。　yy

●秋を感じる季節になりましたね・・・第２号の発行、嬉しいです。このレターも季節同様、変わりゆく柔軟性を持ちあわせる存在でありたいと思いながら手作りしています。日々語られる保育＆子ども観を丁寧に育むため、ぜひご参加を・・・。心よりお待ちしています☆　im

臨床育児・保育研究会 ニュースレター Vol.2　◇発行日…2008 年 10 月 14 日
◇発行:臨床育児・保育研究会（代表:汐見稔幸）ニュースレター編集班　◇事務局…info@ikuji-hoiku.net
◇編集スタッフ…・青柳 秀雄　・石田 由紀子　・小野村 菜穂子　・小林 淑恵　・徳永 洋子
・松永 静子　・森 郁子　・山川 洋輔　・山下 雅弘